

## 詩人のFelt Meaning : 荒川修作、マドリン・ギンズの遺稿研究にむけて

その他のタイトル	Felt Meaning in Poetry : A Study of Manuscripts by Arakawa & Gins
著者	三村 尚彦
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	51
ページ	A79-A100
発行年	2018-04-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/16169">http://hdl.handle.net/10112/16169</a>

## 詩人の Felt Meaning

— 荒川修作、マドリン・ギンズの遺稿研究にむけて —

三 村 尚 彦

### Felt Meaning in Poetry: A Study of Manuscripts by Arakawa & Gins

MIMURA Naohiko

Shusaku Arakawa (1936–2010) — a modern artist — and Madeline Gins (1942–2014) — a poet — interacted with numerous scientists, thinkers and philosophers, attempting to integrate science and philosophy into art. Among such scientists was Eugene Gendlin (1926–2017), a world-renowned advocate for focusing-oriented psychotherapy. Although it was known that Gendlin was writing a paper on Arakawa and Gins, until recently little was understood about what kind of interests Arakawa and Gins had in the Gendlin philosophy. In 2017, I examined manuscripts by Arakawa and Gins, which revealed that Eugene Gendlin had close academic relationships with Arakawa and Gins. Arakawa and Gins were interested in the function of blanks in poetry studied by Gendlin and David Kolb; Arakawa and Gins made notes on this, to which I succeeded in gaining access.

This article focuses mainly on the arguments between Gendlin and Kolb, discussing the function of blanks in poetry and expanding on descriptions of the reasons for their different views on it. My purpose is to further advance the study of manuscripts by Arakawa and Gins.

Kolb believes that the two categories of 1) symbols and 2) blanks represent felt meaning, and that they are independent discrete concepts that interact with each other, whereas Gendlin believes that these two categories are presented a priori, and that they do not interact with each other or provide support as discrete entities.

Through the study of Arakawa and Gins' manuscripts, this paper reveals how Arakawa and Gins understood their different views on the function of blanks in poetry.

**キーワード：**荒川修作 (Shusaku ARAKAWA)、マドリン・ギンズ (Madeline Gins)、ユージン・ジェンドリン (Eugene Gendlin)、ブランク (Blank)、天命反転 (Reversible Destiny)

## はじめに

現代美術家の荒川修作（1936-2010）と詩人のマドリン・ギンズ（1942-2014）（以下、二人を合わせて荒川+ギンズと略記）は、1960年代からニューヨークにて創作活動を開始した。1971年、図式絵画とテキストで構成された『意味のメカニズム Mechanismus der Bedeutung』（1971年初版ドイツ語版、日本語版は1979年）を発表、それが高く評価され、アメリカ、ヨーロッパの現代アートシーンで活躍する。その後、彼らが空間体験型のインスタレーション作品を経て、建築へとその作品制作の場を拡張していったことは、広く知られている。またそれと平行して“*Architectural body*”（2002），“*Making Dying Illegal: Architecture Against Death: Original to the 21st Century*”（2006）といった思想書も出版している。こうした活動から、荒川+ギンズは自らを、芸術、科学、哲学を総合するコーデノロジスト Coordinologist と称するようになった。実際、彼らは多くの科学者、思想家、哲学者と交流していた。例えば、物理学者ハイゼンベルグをはじめとしたマックス・プランク研究所の科学者たち、イタリアの代表的作家イタロ・カルヴィーノ、フランス現代思想の哲学者リオタールなどの名が挙げられる。そのうちの一人に（これまでこの関係はほとんど注目されてこなかったが）ユージン・ジェンドリン（Eugene Gendlin, 1926-2017）がいる。ジェンドリンはフォーカシング指向心理療法 focusing-oriented psychotherapy の提唱者として世界的に著名な心理学者であるが、カウンセリング技法の研究およびその普及に取り組む一方で、元々は哲学（特にデイルタイや現象学）を専攻しており、一貫して哲学研究も行っていた。荒川+ギンズとジェンドリンの関係・交流のうちこれまで公になっているのは、2010年3月にネットミーティングの形で開催された第3回荒川+ギンズ国際カンファレンス（AG3）にてジェンドリンがチャット会議に参加したこと、またオンラインジャーナル *INFLExions* の荒川+ギンズ特集号（Vol. 6, 2013）にジェンドリンの荒川+ギンズ論 Arakawa and Gins: The Organism-Person-Environment Process<sup>1)</sup> が掲載されていること、この二つと思われる。荒川+ギンズ研究者に、ジェンドリンという心理学者はほとんど知られていないであろうし、フォーカシングに関心を持つ臨床心理学者やカウンセラーのなかで、荒川+ギンズの名に聞き覚えがあっても、ジェンドリン哲学と深い関わりがあったことを知る者はごくわずかであろう。

---

1) 本論文は、2017年11月に刊行されたジェンドリンの著書 *Saying what we mean* にも収められている。また岡村心平による邦訳もある「アラカワ+ギンズ：有機体-人間-環境プロセス」『関西大学東西学術研究所紀要』50巻、関西大学東西学術研究所刊、381-393頁、2017年。

本論考では、荒川+ギンズの遺稿調査<sup>2)</sup>がスタートしたことによって明らかになってきた荒川+ギンズとジェンドリンとの思想的な影響関係について、今後研究を深めていくための予備考察を行う。第1章では、遺稿調査に着手して以来、明らかになってきた荒川+ギンズとジェンドリンの関係を述べていく。次に、主にギンズによって作成されたと思われるが、ジェンドリン哲学に関する荒川+ギンズの研究ノート、引用ノートで言及された論点、ジェンドリンとデビッド・コルブ (David Kolb) との間でやりとりされた「空白 blank」をめぐる議論を取りあげていきたい。ジェンドリンはブランクの機能について何を考え、それをコルブはどのように解釈したのか、検討していく (第2章)。最後に (第3章)、両者の見解の相違について結論を導く。それを通じて、荒川+ギンズ (特にギンズ) がそこに何をしようとしていたのかを今後考察するための準備作業を行う。

## 1 荒川+ギンズとジェンドリン

まずはジェンドリンが提唱したカウンセリング理論について、ごく簡単に紹介しておこう。シカゴ大学および大学院の哲学専攻でディルタイや現象学などを研究していたジェンドリンは、同時に (1950年前後) パーソンセンタードアプローチで有名な心理学者カール・ロジャーズのカウンセリング実習に参加していた。そこでジェンドリンが探究した問いは、どのような場合に心理療法が成功しているのか、効果をあげているのか、というものであった。ジェンドリンが出した答えは、クライアントが何を話すかではなく、その発話がどのように成立しているかが重要だというものである。カウンセリングを成功にもたらすのは、自分の身体で感じている意味に触れて語るという話し方である。身体で感じている意味とは、言葉にはできない (うまく表現できない) が、漠然としつつも一定の理解をもっているという事態であり、ジェンドリンはそれを「感じられた意味 felt meaning」、フェルトセンス felt sense と呼んだ。フェルトセンスにフォーカスし (焦点を当て)、そこから自分の置かれている状況について語っていくとき、自己理解にフェルトシフト felt shift、あるいは進展 carrying forward と呼ばれる変化が生じる。この変化によって、クライアントにはストレスの軽減、解放感の促進がもたらされる。これがジェンドリンのフォーカシング指向心理療法の骨子である。

ジェンドリンが主張するこうした臨床心理学、カウンセリング実践の背景には、生の哲学、現象学、プラグマティズムなどに関する研究によって培われた彼独自の哲学、すなわち体験過

---

2) 科学研究補助金・基盤研究 (B) 荒川修作+マドリン・ギンズ遺稿データベース構築にもとづく天命反転思想の研究 (課題番号: 17H02289) による。

程理論 theory of experiencing がある。体験過程理論とは、フェルトセンスとシンボルの相互作用を論じたものである。従来、それはカウンセリング研究の文脈で理解されてきたが、この理論はより深い哲学的含意をもっている。その含意は二つある。一つは、フェルトセンスはわれわれの日常においてたえず機能し、それが日常生活の自明性を形成しているというものである。フェルトセンスは、言葉には言い表せないが、対象や状況について漠然とした一定の理解をもっていることを意味している。日常生活におけるごくありふれた振る舞いのほとんどは、一種の身体知、能力知によって遂行されている。例えば、駅の改札を通過して電車に乗り込むという行為は、「次はこの階段を昇って、改札の切符投入口に定期券カードを通して……」といったように、そのすべてを心のなかで言語表現してなされるわけではない。状況についての理解と知は、振る舞いや状況における対処の仕方によって示されることから、いわば身体知 bodily knowledge あるいは能力知 know-how と言われうるものである。これがフェルトセンスの機能の一つである。

そしてもう一つは、フェルトセンスは、シンボルと相互作用することによって新しい意味を創造するということである。体験過程は、いつもフェルトセンスが暗黙的理解 implicit understanding として機能している状態である。その一部をシンボル化するとき、自分も明確には気づいていなかった体験の側面が露わになる。また同時にそれだけでは言い表せていない体験のより多くの部分があることにも気づく。こうして体験過程は、シンボルとの相互作用することで、フェルトセンスとシンボル両面に新しさ novelty を創造しつつ、変化していく。それこそが体験というものの本来的なあり方であると、ジェンドリンは主張する。

以上のような哲学と臨床心理学の実践的技法を提唱したジェンドリンは、上述のように、荒川+ギンズに関する論文を公刊した。その詳細に立ち入ることは他の機会に譲ることとして<sup>3)</sup>、ここではジェンドリンが荒川+ギンズの何に注目したのかだけを確認しておこう。

荒川+ギンズの創作物は、インギング inging へのアクセスを提供しようとする試みである。その結果、われわれも、彼らがやったのと同様、インギングのうちで創造することができるのであり、そこから語るができるようになる。こうした新しい使用において、語は新しい意味を獲得する。したがって、言語の本性、身体というものは、必ずしも、既存の意

---

3) なお、ジェンドリンの荒川+ギンズ論に関する考察は、拙稿「コウモリになり、人間になる有機体 —— 荒川修作、マドリン・ギンズ「天命反転」について ——」関西大学文学論集 第64巻第3号、1-28頁、2014年において、一部行われている。

味、パターン、フレーズ、概念によってとらわれるものでないことが示されるのである<sup>4)</sup>。

ここでジェンドリンがインギングと呼んでいる働きは、フェルトセンスのことを意味している<sup>5)</sup>。したがって彼は、荒川+ギンズの制作活動は言葉を超えて漠然と身体的に理解しているもの、すなわちフェルトセンスからの創造であると捉えている。フェルトセンスにおいて、かつフェルトセンスから言葉を生み出し、新しい意味を創造することこそが体験過程である、とジェンドリンは規定している。したがって、ジェンドリンによれば、荒川+ギンズは、体験過程による作品制作を行ったアーティストなのである。それは荒川+ギンズが「人は死ななくなる」という天命反転 *reversible destiny* という思想を提示していたこととも関係しているだろう。というのも、「人が死ななくなる」という見解こそ、従来にはないまったく新しい理解を必要とするものだからだ。人間とはいかなる存在者なのか。人間について、われわれは新しい理解を創造していかなければならないのである。ジェンドリンの議論は、荒川+ギンズの活動を読み解く一つのフィルターをわれわれに与えてくれると言えるだろう。

以上のように、ジェンドリンが荒川+ギンズをどのように捉えたのか、またどのような可能性を見だしていたのかは、ジェンドリン自身の論文によってはっきり示されており、われわれはそれを手がかりにさらなる考察へと進んでいくことができる。その一方で、荒川+ギンズがジェンドリン哲学、フォーカシング、フェルトセンスをどのように受けとめていたのかは、これまで不明であった。しかし、荒川+ギンズの遺稿研究が着手されたことによって、少しずつその関係が明るみにもたらされてきた。ニューヨーク荒川+ギンズ研究財団 *Reversible Destiny Foundation* (以下、RDF と略記) から提供された荒川+ギンズの蔵書リストによれば、荒川+ギンズは、ソーホー地区にあったオフィスビル<sup>6)</sup>の書棚にジェンドリンの著作2冊 *Focusing-Oriented Psychotherapy* (1996)、*A Process Model* (1997) を所有していた。しかし、いずれも書き込みなどは見られないとのことであり、この2冊を荒川+ギンズは読んでいたのか、仮に読んでいたとしてもどの程度の関心をもっていたのかはわからなかった。ジェンドリンが一方的

4) Gendlin, Arakawa and Gins: the Organism-Person-Environment Process, p. 223

5) ジェンドリンは、論文のタイトルとして挙げている「有機体-人間-環境」というハイフンで結びつけられた三つの要素は、それぞれ独立に存在するのではなく、それらが生成することが最初にあり、その生成の働き、およびまさに生成しているその過程にあるということを強調している。そのことを表現するために、ing に ing を重ねたインギングという術語が導入された。

6) ニューヨーク West Houston Street にあった荒川+ギンズが居住および制作活動を行っていたビル。すでに売却され、所蔵されていた蔵書や資料は RDF が管理保管している。遺稿資料は段ボール箱で230個にのぼるとのことであった。

に荒川+ギンズに献本した可能性も考えられる。

2017年5月と11月の二度にわたって筆者は、RDFのオフィスにて荒川+ギンズの遺稿資料を閲覧する機会を得た。オフィスビルの売却移転に伴い、蔵書や研究関係の書類は、ビルの何階のどこに置かれていたかに応じて箱詰めされ、倉庫で保管されている。5月の閲覧では、全230個のうち、30箱ほどがRDFオフィスに運び込まれており、まずは荒川が日本に送信したファックスレターを見つけ出し、それをデジタル化するという目的で調査を行った。引越しの箱詰め作業時に作成された大まかな内容リストはあまり正確ではなく、「日本語文書 Japanese documents」というリスト表記にもかかわらず、ほとんど日本語資料が入っていない箱もあった。結果、われわれはファックスレターを見つけることができなかった。しかし当初の意図からすると空振りに終わると思われた遺稿調査は、思いがけないいくつかの発見をもたらした。従来から荒川+ギンズとの関係が多く研究者によって指摘されていた生態学的心理学者ギブソンの論文コピーがあり、かつ、そこには多くの書き込みが見いだされた。またギンズの著書である *Helen Keller or Arakawa* (1994) の第26章にある「 $\dot{\lambda}$ 」に関する論述の草稿も見つかった。そして、Gendlin というタグのついたフォルダーには、ジェンドリンの論文 *How Philosophy Cannot Appeal to Experience, and How It can* (1997)<sup>7)</sup> のコピーと felt meaning というタイトルがついた A4 版27頁分の研究ノートが収められていた。これにより、荒川+ギンズがジェンドリン哲学に関心を抱き、彼の論文を読んでいたことがはっきりとした。研究ノート、引用ノートの存在は、荒川+ギンズが、ジェンドリンをどのように読み、理解し、何を考えたのかを知る重要な手がかりとなるだろう。また11月の資料閲覧ではさらに、ジェンドリンと荒川+ギンズの交流は、2001年あたりから始まっていたこと、メールのやりとりがコンスタントになされており、ジェンドリンに自分たちの構想(天命反転)について質問状を送り、それに対するジェンドリンから回答があった(これについてはジェンドリンだけでなく、荒川+ギンズは多くの人に「人は死ななくなる」という考えをどう思うか、またその実現可能性などをアンケート調査のように尋ねていた)ことがわかった。ギンズが所有していたタブレット (iPad) には、ジェンドリンに関するコメントを録音した音声データが二つ(それぞれ1時間程度)見つかり、PCには、「ジェンドリン」というタイトルの付いたフォルダーが複数あり、Process Model.vsd (Microsoft社製図形描画ツール「VISIO」で作成された図面ファイル)、Gendlin on Heidegger.

---

7) *How Philosophy Cannot Appeal to Experience, and How it Can*, Levin, D. M. (Ed.). *Language beyond postmodernism: Saying and thinking in Gendlin's philosophy*. Evanston: Northwestern University Press, 1997. レヴィンのこの著書は、哲学者、心理学者、言語学者などがジェンドリン哲学に関する論文を収録し、かつそれぞれにジェンドリンが応答するというものになっている。



docというワードファイルなど、多くのデータがあることが判明した。以上の事実から、荒川+ギンズとジェンドリンの間には相互の影響関係があったと考えることは合理的だろう。

その全貌に関してはさらなる遺稿研究によって徐々に明らかになっていくと思われるが、以下では5月の調査で見つかったジェンドリンの論文に関する引用ノートの存在をふまえ、ジェンドリンの「空白・ブランク」に関する考察を取りあげていく。ブランクは、荒川+ギンズにとって『意味のメカニズム』以来、一貫して重要概念である。1988年に出版された『意味のメカニズム』第三版の改訂版の序には以下のように記されている。

われわれは今では、“思考する環境 thinking environment” を作り上げている決定的な出来事に合った多くの新しい用語を用いている。“blank” (ブランク)、“cleaving” (切り閉じること)、“fiction of place” (虚構の場所) という言葉は、改訂版の「検討と自己批判」の章でだけ使われている。しかしそれらの用語は、あきらかにそれ以前の章でのわれわれの作業から発展してきたものであるから、同一ではないにしても、類似した線上の、さらにつっこんだ探究を示している。したがってそれらは、作品全体をとおして有効だと考えられるべきである<sup>8)</sup>。

荒川+ギンズ自身がブランクについて語り、また多くの荒川+ギンズ論で、ブランクについての言及がなされている<sup>9)</sup>。その意味で、荒川+ギンズがジェンドリンのブランク論に注目したのは当然と言えるだろう。では、ジェンドリンはブランクについていかなる思想を展開したのであろうか。

## 2 詩人の Felt Meaning、あるいはブランクを埋めること

### (1) ブランクの機能

ジェンドリンは、論文 *Thinking Beyond Patterns* において、詩作におけるブランクとセラピーにおける沈黙の機能を論じている<sup>10)</sup>。詩人だけに限らず、何か文章を書こうとするとき、われ

8) 荒川修作/マドリン・ギンズ『意味のメカニズム』第3版、リプロポート、1988年、改訂版の序。

9) 本江邦夫「荒川というブランクについて」『現代思想 総特集 荒川修作+マドリン・ギンズ』1996年8月臨時増刊号、青土社や、塚原史『荒川修作の軌跡と奇跡』NTT出版、2009年などを参照。

10) Gendlin, *Thinking beyond patterns: Body, language and situations*. In B. den Ouden & M. Moen (Eds.), *The Presence of Feeling in Thought*, pp. 25-151. New York: Peter Lang, 1991. ジェンドリンのこの論文に関しては、拙論「ジェンドリンとポストモダニズム —— プロセスの論理 ——」『関西大学文学論集 第59巻第3号』2009年、1-26頁を参照されたい。

われは、内容をあれこれ考え、どのような言葉やフレーズが適切であるか試行錯誤しながら、執筆を進めていく。その作業はいつも順調に進行していくとはかぎらない。いくら考えても、これだという語が浮かばず、筆が停まってしまう。この停滞を打開しようとして、われわれはこれまで書いてきた文を繰り返し何度も読み返してみる。そうしているうちに、ぴったりと腑に落ちる語句、フレーズ、文章が思いつく、到来してくるのである。「何かが到来してくる Something does come」<sup>11)</sup>。ジェンドリンはここにブランクが果たす機能、すなわちフェルトセンス、felt meaning<sup>12)</sup>の働きを見てとるのである。felt meaningとは、先に述べたように、言葉に明確に言い表せない（もしくはいちいち言明にもたらさない）が、身体的に漠然と暗黙的に理解しているもの、ないしそうした状態のことであった。例えば、詩人が詩作の過程で、次の一行はどのようなものがよいか熟考しているとしよう。ジェンドリンによれば、そのときブランクが機能しているのである。ブランクは、文字どおりまだ言葉が浮かんでいない空白、空欄の状態である。その意味で言葉は欠如している。しかしブランクには次にやってくるであろう（やってくるにふさわしい）言葉、フレーズ、語らなければならないものが、すでに何らかの仕方存在している。暗黙的に存在している。そしてそれを詩人は、身体的に理解している。ブランクにおける felt meaning は、語るべき言葉が欠如しているのではなく、いまだ到来していない新しい語句を要求し、含んでいるのである。詩人の暗黙的理解は、浮かんだ語句が適切かどうかを判定することができるのである。しかしそれは、あらかじめ存在していた心中の語句を単に表現して満足するというのではない。その語句はたしかに詩人の felt meaning から出てきたものであるが、しかし詩人自身がその語句によって自らの発想や情感を新たに（ある種の驚きをとまなつつ）発見するのである。こうしたあり方は、詩作といったクリエイティブな表現活動のみならず、われわれの通常の発話においても見いだされる。われわれの発話は、語りたいこと、伝えたいことを頭（もしくは心）の中で明確に言語化し、それを音や文字にしているわけではない。ロボット工学の研究者岡田美智男によれば、言い淀みや言い誤りは、従来「スピーチ・エラー」「錯誤」として捉えられてきたが、むしろそれらは発話において本質的なもの、前提されたものなのである。

「どうなってしまうかわからないけれど、とりあえず何かを話してみよう」と投機的に繰り返す

11) Gendlin, *Thinking Beyond Patterns*, p. 47

12) タームとしてはフェルトセンスの方が定着しており、本稿第1章でもフェルトセンスという語を用いてきたが、以下では、荒川+ギンズの研究ノートのタイトルが felt meaning だったことをふまえ、felt meaning を用いることにする。

出される発話は、結果として新たな想起を引き出し、次の発話をナビゲートしていく。この拮抗した関係がリアリティを伴う、オリジナルな意味を生み出しているのである<sup>13)</sup>。

発話に必然的に組み込まれている言い淀みとは、ブランクの頻繁な到来のことである。なおここで岡田が「投機的」という語を使っていることから、ブランクの後に来る語の選択は恣意的であるような印象を与えるかもしれない。それについてはこの後、ジェンドリンとコルブのやりとりのなかで明らかにしていく。

デヴィッド・コルブ David Kolb<sup>14)</sup> は、「ブランクを埋めること Filling in the Blanks」という論文においてジェンドリン哲学への批判的考察を展開し、それに対してジェンドリンは反論となる応答をしている（このやりとりに関して荒川+ギンズは引用ノートを作成していた）。以下では、コルブがジェンドリンをどのように捉え、いかなる批判を行ったのかを見ていこう。

## (2) 先行する行とブランクの相互作用

ジェンドリンが抱いている一貫した関心は、概念、論理的パターン、形式を超えたものによる思考、すなわち自分が身を置いている個別的で具体的な状況のなかで、その状況そのものを用いて考える可能性である。われわれの思考は通常、論理法則を遵守し、語の意味論的な包含関係を展開することによって進行していく。そうでなければ、その考えは矛盾を含み、論理的に破綻していることになるからだ。しかし、ジェンドリンはわれわれの思考や体験の進展は、かならずしも論理的形式によってのみもたらされるわけでないことを、心理カウンセリングの実践を通して確信したのである。パターンを超えたもの、非形式的なものによる思考とはいかなるものなのだろうか。

デヴィッド・コルブは、ジェンドリン哲学を参照しながら、形式的なものと非形式的なもの the formed – the unformed の関係を論じている。コルブの考察は、他の認識論の哲学や言語哲学との比較を通じて、ジェンドリン哲学の可能性と限界（問題点）を明らかにしようとするものであった。

13) 岡田美智男『弱いロボット』医学書院、2012年、73頁。

14) David Kolb という名を聞くと、体験学習 Experiential learning を提唱したことで有名なアメリカの教育学者を思い浮かべるかもしれない。しかしこちら（名前も生年も同じだが）は、ヘーゲルなどを中心にしたドイツ哲学研究者の David Kolb である。David Kolb, Filling in the Blanks, in D.M. Levin (Ed.), Language beyond postmodernism: saying and thinking in Gendlin's philosophy, Evanston: Northwestern University Press, 1997, pp. 65-83.

先に確認したように、詩作において先行していた行とブランクは相互作用し、それが詩人のもとに新しい行を生じさせる。ブランクは（言葉が欠けているがゆえに）曖昧であるが、しかしまた同時に（適切な言葉を選び出すがゆえに）精密 precise である。このとき、ブランクはどのように機能しているのだろうか。詩人は内的な心の眼 mental eye を felt meaning に向けて、新しい行およびその適切さを読み取っているのだろうか。しかしこうした説明をジェンドリンは採用しない。というのも、felt meaning は命題的な内容を有してはいないからである。コルブは、20世紀前半の一部の哲学で顕著であった内的体験に明証性や真理の基盤を求める傾向（フッサールの直観的明証や論理実証主義者の基礎的信念 basic belief）が衰退したことを指摘する。内的体験が命題的な内容をもつことで、信念に対して認識論的根拠を提供できると考えるのであれば、内的体験の直接性は（命題的内容が根拠として機能しているので）否定されることになる。また命題的内容をもたないとすれば、体験と信念がどのように関係するのかが不明となるからである。したがっていずれにしても、内的体験を基盤とする考えは維持できない。コルブは、ここで比較対象としてデイヴィドソンを取りあげる。デイヴィドソンの立場は、体験を信念の源泉であると認めつつも、それが何か特別な内的な非命題的明証 inner nonpropositional evidence があることを意味しないとすものである。デイヴィドソンによれば、知に正当性を与え真理とする根拠は、複数の命題で織りなされる論理的関係である。したがって体験は認識の根拠にはならない。だがその一方で、体験と信念の間には因果的な関係がある。すなわち体験はわれわれに命題的信念を引き起こす（原因となる）のである。こうした論理的関係と因果的關係の二つを主張し、かつ区別するのが、デイヴィドソンなのである。だが、ジェンドリンの例による詩人に浮かんだ新しい行・語句と felt meaning の間の関係は、論理的、因果的のいずれでもない。次の行に来る語句の適切さは、他の行の語句との論理的整合性によって決定されるわけではもちろんない。それならば felt meaning に言及する必要はないからである。だからといって、felt meaning がその語句が次に来るべきだという信念の原因となっているわけでもない。コルブによれば、それは、デイヴィドソンの例では、科学的実験の結果を確認するといった比較的独立した体験、信念、命題の関係が問題となっているのに対して、ジェンドリンが語るころの felt meaning は、単にある語句の適切さに関わるのではなく、詩作全体あるいは詩人の生全体に関わるものだからである。ジェンドリンの関心の中心は、言語、学的営み、芸術、行動、心理療法などにおいてわれわれを前進させる創造や発明・発見の源泉は何かということであった。したがって、ジェンドリンとデイヴィドソンは、そもそも問題にしている事象が異なっているのである。では、コルブがこの2人を比較とする意図は何であるのか。それは両者が論理実証主義を批判するという点で共通しているからである。ここで想定されている

論理実証主義とは、直接的な感覚経験にもとづいて真とされるプロトコール命題と論理的推論によって学問や信念体系が基礎づけられるというものである。

それゆえ、われわれはセラーズ、クワイン、デイヴィドソンといった思想家が到達した結論がジェンドリンのプログラムに関係ないものとして簡単に片付けることはできないのである。彼らは実証主義を解体することに助力したのだから<sup>15)</sup>。

認識論哲学や言語哲学の文脈でジェンドリン哲学を位置づけたとき、それはどのような意味合いをもつのだろうか。コルブは、ジェンドリンの試みを現在においても依然として有力な哲学的見解を覆そうとするものだと捉えている。「志向性は命題的な内容をもった一連の信念や欲求に位置づけられる」という要求は、今なお生きながらえているデカルト主義者（コギトといった内的明証が認識論と存在論の起点になるという主張を肯定する陣営）にも、こうしたデカルト的主張に与しない者にも、不問のままにされているが、ジェンドリンはそれを突き崩そうとしている。意識作用を遂行する場合、例えば「想起」を行おうとすれば、われわれは必ず「何か」（昨夜の出来事など）を思い出すことになる。想起の対象が欠如した状態で想起作用は遂行されない。この志向性という体験の特徴は、「昨夜、〇〇という出来事があった」という信念にもとづいているのである（仮に実際にその出来事が起こっておらず、この信念が偽であったとしても）。ジェンドリンの見解は、この前提を否定するものである。felt meaningは明確な命題的内容をもたない。しかし、それは、体験過程という志向的なプロセスのうちで判断基準および判断内容の源泉として機能する。また体験は、シンボルや命題から独立に存在することはない。言語と思考は、それらが意味しているものを進展させる carry forward。これらがジェンドリンの見解の核心をなしているからである。しかしながら、これはどのような主張なのだろうか。命題的内容をもたないにもかかわらず、シンボルや命題から切り離されないというのは矛盾しているのではないだろうか。

コルブは、ジェンドリンの一見両立しがたいように思われる見解を検討するために、詩作におけるブランクに関する二つの考え方を提示している。(i) ブランクにおいて、詩人は繰り返し読み返す既述の行は、不可避的な連続をもった構造を引き起こす。詩人はその構造を見て取ることによって、次の行が確定するという考え方。これは、felt meaningが判断基準となり、判断内容を確定する力をもっているという部分に対応する。しかし、ジェンドリンは新しい行や

---

15) Kolb, p. 67

語句がこのような仕方では潜在しているとは語らない。felt meaning は漠然としたものであり、前言語的で言語を超えたものとされるからである。(ii) 先行する行はつねにオープンであり、新しい行に対していかなる制約も与えない不確定なものとする見解。言葉にならない漠然とした身体的な感じ felt meaning に依拠するといえば、当人が感じたように言葉を選択していると思われる。したがってそれは客観的基準をもたず、当人の恣意的な判断であり、それこそ自由な詩作とする考え方である。しかし、ジェンドリンは felt meaning は恣意的なものとは考えていない。コルプの見立てでは、ジェンドリンは i と ii の中間に位置するものとなる。ここでもコルプは、ジェンドリンの独自性を際立たせるために、二つの見解を比較対象として提出する。プラグマティックな説明 pragmatic story とダーウィンの説明 Darwinian story の二つである。コルプがプラグマティックな説明と呼ぶものは、i の側面について「一般性の提示」ということで捉え、ii にはその枠内での個別性を認めるものである。具体的に言えば、先行する行は一般的なレベルで以後の語句やフレーズの可能性の範囲を設定する。一般的な枠組みは確定されているが、その内部の特殊規定は与えられていないので、詩人はその範囲内で好みのものを選択できるというものである。例えば、先行する行において、この後につづく語句は悲しみに関するものであるということは予描されたが、その悲しみがいかなる語句で表現されるかは未定というものである。しかしこれでは、漠然として曖昧であるにもかかわらず精密に意味を規定する felt meaning の機能を単に一般化のプロセスへ還元し、普遍と特殊、一般と個別の関係に変形してしまうことになる。もう一つの中間的な見解、ダーウィンの説明は、コルプの定義では、詩の先行する行は、まさにそれが意味するままにある。新しい行は、ランダムにもしくは合理的とは限らない nonrational プロセスによって生み出されるのである。このとき、なんらかの創造は生じるが、それ以外のものが創造されることはない。こうした創造によって詩全体が新たに作り直される。このプロセスは循環的なものとなる。すなわち、先行する行から複数の選択肢の発生し、そのうちの一つが生き残る。それによって新しい全体が再編され、先行する行に対して遡及的な正当化がなされ、再び詩に対する新しい創造が生じる。この繰り返しが進化論をモデルにした説明となっているということである。だがコルプは、この説明もジェンドリンには二つの理由で当てはまらないとしている。ダーウィンの説明では、先行する行は、それ自体で完結したものであり、一定の意味を完結させているとみなしているが、ジェンドリンはこれを否定する。また、新しい行を生み出すこととそれを受け入れること、これらを二つの分離しうるプロセスと考えているが、これもジェンドリンの見解とは異なるからである。

ジェンドリンは、先行する行とブランクが結合 (= 相互作用) することで達成される (それに続くフレーズを生み出す) 「導き」を理解しようとしている。ポイントは、相互作用にある。

先行する行がまずある。そしてブランクが生じる。その二つが相互に作用し、来たるべきフレーズが生み出される。こうした説明を拒否するのが、ジェンドリンなのである。

「相互作用する」分離したいくつかのプロセスが存在するように思われる。それらがまず多く存在し、次に相互作用する、と思われるかもしれない。そうではなく、わたしが「最初に相互作用 interaction first」と呼んでいるタイプの概念を用いよう。相互作用プロセスとは、それが差異化されるよりずっと前に存在するものなのである。<sup>16)</sup>

先行する行、ブランク、到来する行は、単なる時間的配列ではない。それは状況そのものも持つ厚み situational thickness を意味しているのである。この論点、すなわち interaction first を指摘したコルブは、ジェンドリンの議論がもっているポテンシャルを理解していると思われるが、この後、ジェンドリン批判を展開していく部分で、結局ジェンドリンが語る相互作用を取り損なうことになる。引き続き、コルブの議論を追っていこう。

### (3) felt meaning とシンボルの相互作用

ジェンドリンは、これまでのどの説明とも異なる独自な見解を提示し、現代においても依然として有力な「命題的内容を有した志向性」という前提を乗り越えようと試みたと評価したコルブは、次にジェンドリンの問題点を指摘することへと進んでいく。批判の骨子は、ジェンドリンが自身の立場を意味の不十分な理論（論理経験主義<sup>17)</sup>）に対立するものと述べているにもかかわらず、ジェンドリン自身の理論にそうした経験主義の痕跡が残っているというものである。その批判内容を具体的に見ていこう。

コルブは、ジェンドリンが『体験過程と意味の創造』の中で、felt meaning が内的な与件であり、概念によって表示されると主張している点を問題視する。言葉に言い表しがたいが身体的に漠然と感じられている felt meaning がシンボル・言葉によって表明化されることは、全体としての体験のある一つの側面が当のシンボルによって言い当てられたということを意味する。したがって felt meaning の表明化は、いかなるシンボルが用いられたかに依存していることに

16) Gendlin, *A Process Model*, p. 23

17) コルブは logical empiricism という呼称を用いている。哲学的に言えば、「論理経験主義」とは特定の学説を指すものではなく、論理実証主義以降の英米を中心とした20世紀の経験論をも含んだ哲学運動のことを意味するが、ジェンドリンが『体験過程と意味の創造』で批判しようとしたのが、実証主義であることをふまえると、コルブがここで念頭に置いているのは、論理実証主義と思われる。

なる。例えば、大雨も「激しい雨」と表現するか、「豪雨」という語を使うかによって、その雨に対してわれわれは微妙に異なる印象をもつであろう。それと同じように、felt meaning を言い当てるシンボルによって、felt meaning の理解に違いが生じるのである。このこと自体は、はっきりジェンドリンも述べている。フォーカシングのセッションにおいてフォーカサー（クライアント）は自分の felt meaning にもとづいてさまざまなシンボル化を試みる。

その言葉はどれも彼女の感情にはピッタリという具合にはいかなかったようです。なぜなら彼女の声は不服そうに聞こえましたから。もっと正確な言葉がその感情から出て来はしまいかと。もう一度彼女はその感情と言葉とをつき合わせてみたのです。彼女は特定の身体的感覚にもっとぴったり符合する表現を求めてあれこれ試みていたのです（原文ママ）<sup>18)</sup>。

ある言葉で felt meaning をシンボル化するとぴったりとした感じをもち、それとは別の語では当てはまらなると身体的に感じられる。こうしたプロセスによって自己理解の進展をもたらすのがフォーカシング指向心理療法であることはすでに確認した。この主張からコルブは次のような批判を展開する。

シンボルは、felt meaning から独立にその確定性 definiteness と個別性 individuality を確立する対比と結合をもつ。さもなければ、シンボルはジェンドリンがそれに求めた機能を果たすことはできなくなるだろう<sup>19)</sup>。

シンボルは felt meaning と相互作用すると言われているが、上記のようにシンボルが全体的である felt meaning の一定の側面を際立たせるという働きをする。コルブの指摘は、felt meaning の一側面を言い表すためには、シンボルが独立に何らかの確定的な意味を持ち、かつそれが他の語との対比の中で区別されなければならないというものである。シンボル X がシンボルとして何かを言明できるのは、X が不確定にさまざまなものを意味するのではなく、a という字義的意味を確定的に有し、かつそれは b という字義的意味をもつシンボル Y と区別されていなければならないというのである。そうでなければ、X というシンボルを用いて felt meaning のある

---

18) ジェンドリン『フォーカシング』邦訳35頁。原著では若干表現が異なるのだが、フォーカシングの入門書として広く受けいれられている邦訳を見ると、クライアントが自分のフェルトセンスにぴったりする言葉を見つけるために何度も言い換えを試みるということが理解できるだろう。

19) Kolb, p. 76



側面 a を言い当てることができなくなるからである。こうしたことを考慮すると、同時に felt meaning に対しても同じ問題が生じてくる。

felt meaning そのものも (たとえそれがどの程度であれ、「単独で」〔存在しているとして〕)、対比に、今のケースではその他の可能な、しかしその時には感じられていない身体的意味との対比にもとづいているとしたら、どうであろうか。そうでないとすれば、ジェンドリンは論理経験主義者を悩ませ、場合によってはデイヴィドソンの因果理論へと通じていく問題に取り組みなければならないだろう。〔しかし〕 felt meaning が何らかの仕方に対比と差異に依存しているのであれば、ジェンドリンが求めた非形式的な豊かさ unformed richness とは別の不確定性という次元がもう一つあることになるだろう<sup>20)</sup>。

端的に言えば、felt meaning は何らかの (暗黙的な) 理解をもっており、かつそれがシンボルとは独立した形で機能するのだとすれば、その意味の確定性 (適切なシンボルを選択するといった規定性) の源泉は、その felt meaning が他の felt meaning とは区別されるということによって可能となるというものである。ある人の職場内の状況に対する felt meaning は、趣味で通っているヨガ教室の状況に対する felt meaning とは異なり、かつそれによって職場についての漠然とした感じに違和感や居心地の悪さをもっていると判断できるのであり、それに「重苦しい」といった表現が当てはまると判定できるとされる。この捉え方をジェンドリンが否定するのであれば、felt meaning に認められるポジティブな不確定性とは異なるネガティブなそれを受け入れることになるのである。すなわち、felt meaning は一つの言葉、シンボルだけでは言い尽くせない豊かさ、いわば無尽蔵な複雑さをもっている。それゆえ完全に確定することはできない (ポジティブな不確定性) と言われていたのに対して、この felt meaning とあの felt meaning 相互の比較による確定と個別化が不可能なのであれば、felt meaning とはそのつど適当かつ恣意的に規定される不確定なもの (ネガティブ) になってしまうのである。

以上、コルプのジェンドリン批判を見てきた。端的に言えば、シンボルは felt meaning と相互作用する前に、シンボル間の対比と差異のうちで一定の確定的な意味をもたなければならず、また felt meaning も同様にシンボルとの相互作用する前に、felt meaning 相互の意味規定が存在するというものである。この批判は正当なものなのだろうか。次にジェンドリン自身によるコルプへのリプライを検討するとともに、ジェンドリン哲学の問題点を見ていくことにしよう。

---

20) *ibid.* p. 77、〔 〕内は引用者による補足。

### 3 はじめにある相互作用あるいはブランクの開け

ジェンドリンの応答は、端的に言えば「コルブは誤解している」である。すなわち、主張していないこと、むしろ否定しようとしていることをジェンドリンの見解であるとコルブが捉えているというである。

先に確認したように、felt meaning はそれを言い当てるシンボルによって理解に違いが生じる。felt meaning は異なるシンボルによって特定化されることで異なる結果をもたらす。そこからコルブは、次の二つのことを帰結として引き出している。一つは「思考の結果は、シンボル・記号に依存する」。もう一つは、全体的で漠然とした身体的な感じである felt meaning のいかなる側面が明示化されるかはシンボルに依存するのであれば、「シンボルは felt meaning から独立に確定的な意味をもたなければならない」という主張である。前者の見解について、ジェンドリンはこれを完全に否定する。そうした見解は、自然科学を単なる構成とみなす誤った構成主義に陥ると考えているからである。悪しき構成主義では、研究者が採用する前提が異なれば、異なった発見が結果してくる。自然科学理論とは、ある前提から構築される説明の体系にすぎず、極端な相対主義となってしまうのである。ジェンドリンはたしかにシンボルによってフェルトセンスの理解に違いであると述べているが、それは記号、シンボルに依存して結果が相対的になるということ在意図しているわけではない。

「応答的秩序 responsive order」がある。それは、異なる仕方で進展させられるが、しかしそれはいつもまさに精密な仕方である。というのも、体験された意味（複雑さ……）が、規定する役割を果たすからである<sup>21)</sup>。

ジェンドリン独自の鍵概念の一つである「応答的秩序」がここで述べられている。それについては後述するが、コルブの一つ目の指摘をジェンドリンが認めていないことは確認されるだろう。

コルブの二つ目の指摘（「シンボルは felt meaning から独立に確定的な意味をもつ」）に関して、ジェンドリンはシンボルが確定性、一定の確定的な意味をもつことには同意するが、それが felt meaning から「独立して」という部分は否定する。つまり彼は felt meaning の独立性を認めないのである。ジェンドリンによれば、シンボルは felt meaning なしには意味をもたない

---

21) *ibid.* p. 78

し、felt meaning もまたシンボルと相互作用することによってしか意味をもちえないのである。というのも、たしかにシンボルの意味は確定的であるが、それはシンボル相互による意味規定だけでなく、felt meaning もその意味の決定に重大な役割を果たしているからである。コルブは、ブランクや felt meaning が意味を決定する役割を果たせることを見落としているのである。その原因は、コルブが言うところの形式と非形式的なものは切り離されず、いつも共在していると認めていたにもかかわらず、非形式的なものを単独で論じ、それだけで規定しようとしたことにある。ジェンドリンにとっては、両者（形式と非形式）が分離不可能で相互作用しているという主張が最も重要なのである。felt meaning とは状況についての理解である。シンボルはいつも一定の状況で使用され、そのなかでのみ何かを意味する。シンボルの意味の確定、つまりこの語がどのようなことを意味しているのかを決定するためには、いかなる状況で語が使用されているか、その語の使用の状況を参照しなければならない。例えば、「きみは時間に正確な人だ」という発言は、待ち合わせ時刻にいつも約束の場所に来て人を待たせることのない人を賞賛、評価していることになるが、一定のトーンで遅刻の常習犯に向けて発せられた場合、それは嫌み・皮肉となり、その人が時間に不正確であることを非難することになるだろう。これに対して「きみは時間に正確な人だ」というフレーズには字義的な意味があり、これは「正確-不正確」といった語の相互規定によって意味が確定されるはずであり<sup>22)</sup>、皮肉のような使い方は、あくまでも字義的な意味を基準にしたバリエーションでしかないという反論が予想されるだろう。しかし字義的な意味ということもまた一つの状況内での使い方であろう。すなわちそれは、「状況の特殊性を捨象して考える」という言語を探究する学問的な態度で言葉を見るという（それ自身一つの）「特定の状況」でしかないのである。語、シンボルは、状況からフリーではありえない。またシンボルの意味は確定的であるが同時に、たえず一定の多義性を有している。それはシンボルが普遍性をもっているがゆえに、目の前の特定の事態を指すことも、あるいは一般的なことを言及することもあるからである。「男たちが働いている」という文は、今、目撃されている工事現場の記述でもあれば、社会問題を論じる研究会において一般的な労働環境についての言及として発話され、ジェンダー的に問題があるとして発話者が糾弾される場合もあるであろう。発話がどのレベルでの言及を行っているかを規定しているのも、felt meaning である。

さらに felt meaning もまたいつもシンボル化されている。

22) 「時間に正確である」という語句は、「時間どおりの行動」を意味し、そうした事態を指示するときに真とされ、待ち合わせ時間に遅れた場合の言及では偽として規定されるという考え方。

形式化されていない体験過程など存在しない。体験過程はいつも、少なくとも出来事によっていつもシンボル化されている<sup>23)</sup>。

ここで体験過程 *experiencing* と呼ばれているのは、*felt meaning*、ブランクのことである。しかしこれはいささか奇妙な主張に思われるだろう。*felt meaning* は、言葉に先立つ、曖昧な身体的感じのことであった。だとすれば、定義上それは言語化されていないはずである。「いつもシンボル化されている」とは矛盾した規定ではないだろうか。ここでのポイントは、「少なくとも出来事によって」という部分にある。コルブへの応答論文では、はっきり述べられてはいないが、ジェンドリンにとってシンボル化 *symbolization* とは、*felt meaning* とシンボルの間で生じる機能から定義される語である。紙幅の関係で詳細に論じることはできないが、ジェンドリンの体験過程理論では、例えば「再認 *recognition*」という機能的関係において、*felt meaning* を呼び起こす働きがシンボル化と呼ばれている。したがって写真や一定の出来事が *felt meaning* を呼び起こしていれば、それらは「シンボル」と言われるのであり、シンボルが言語記号だけを指すわけではない<sup>24)</sup>。したがってどのような機能を果たしているかに応じて、シンボルと規定されるので、言語記号を超えた広い意味で用いられているのである。

いつもワードレスな…… [*felt meaning*、ブランク] があるわけではないが、それが存在するときには、われわれがそれへと注意を向けることによってシンボル化されている<sup>25)</sup>。

*felt meaning* は、そこへと注意を向けて（ジェンドリンの用語では「直接照合」*direct reference*）特定化されるとき、シンボル化されたと言われる。

シンボルの意味は、*felt meaning* によって補完されることで確定する。*felt meaning* はたえずシンボル化されることで *felt meaning* となるのである。したがってシンボルと *felt meaning* は、お互いを支え合う相互内属の関係にある。ジェンドリンがこうした相互性、相互作用を主張するのは、それがわれわれの思考の推進力となり、新しい意味を生み出す創造性の源泉となっているからである。詩作においてあるシンボルが浮かぶ。しかしその後、停滞しブランクが生じる。そのブランクは詩人の置かれている状況と相互作用し、新しいシンボルと詩作の運びをも

---

23) Kolb, p. 78

24) 詳しくは拙著『体験を問い続ける哲学 第1巻 初期ジェンドリン哲学と体験過程理論』、特定非営利活動法人 *ratik*、2015年の第4章を参照されたい。

25) Kolb, p. 78、[ ] 内は引用者による補足。

たらず。このとき、それは語の論理的つながり以上のものが機能し、詩作が進展していったのである。これこそが、ジェンドリンが複雑な応答的秩序と呼ぶものなのである。感じていること、それを記号や状況への対応などを通じて何らかの形で表現したり、特定化したりすること。これらはシンボルの適切さを判定し、同時にそれに伴う感じを変化させていく。ブランクが生じてくる、ブランクが開かれてくることは、こうした相互作用の発動なのである。ジェンドリンが挙げている例を引こう。例えば「何かに取り組んでいる人 a person working on something」というフレーズで何を意味しているのか説明しようとする。この語、フレーズは、起こっていること、生じていることを規定する記号なのではない。むしろ、逆である。状況こそが語を規定しているのである。

語と状況はお互いを規定しあい、たえず再創造 recreate している。この再創造 recreate という語はその語に対してまさに何が起こっているのかを意味させる。そうでなければ、それは意味不明となるだろう<sup>26)</sup>。

用いられる語の違いは（どの語を使うかに応じて）、状況の理解を変化させる。状況の理解は、語の意味の確定に影響を与える。そうした相互作用がわれわれの思考を進展させるとジェンドリンは語っている。上記の引用は、「再創造 recreate」という語が使用状況によって新しい意味を付与されていることの事例になっている。ここで「気晴らしをする recreate」という別の状況で使用される意味を理解したならば、意味不明となってしまうであろう。

議論をまとめよう。コルブは、felt meaning の異なる側面を特定化するのはシンボルであるというジェンドリンの見解から、シンボルが独立に存立し、意味を担わなければならないと考えた。それは、まず形式としてのシンボル、その次に felt meaning という非形式的なものが存在し、両者がその後相互作用するという見方を採用しているからである。それゆえ独立した項としてのシンボルは、シンボル相互の対比・対照によって意味が規定されるとするのである。一方ジェンドリンにとっては、シンボルと felt meaning は初めから相互作用している。相互作用がはじめにある。相互作用の中でシンボルと felt meaning が後から確定され、特定化されるのである。ジェンドリンから見れば、コルブはジェンドリンの体験過程理論を誤解していることになる。

---

26) *ibid.* p. 83

### 結び 荒川 + ギンズ遺稿研究に向けて

以上、ジェンドリンのブランク、felt meaning の考え方をコルブによる批判を通して見てきた。荒川 + ギンズ（特にギンズと思われる）はこの両者のやり取りに惹きつけられ、詳細な引用ノートを遺した。それ自体についての研究は、今後、遺稿研究の権利および著作権の扱いが決定次第、着手していきたい。見通しとしては、荒川 + ギンズはコルブやジェンドリンのブランク論に彼らの主張の理論的根拠を見い出そうとしたと考えられる。

一方、荒川 + ギンズがブランクの働きとして『意味のメカニズム』やその他の作品のなかで示そうとしたことを、ジェンドリンは哲学史の文脈で語ったと思われる。そしてそれはジェンドリンが心理療法家として著名であったがゆえに、哲学研究のなかでその意義はこれまであまり検討されてこなかった。荒川 + ギンズもまた同じような側面があるかもしれない。彼らの活動や思想については、狭い学問領域をはるかに超えるものを目指していたがゆえに、その真意があまり伝わってこなかった（総合的な研究が必要とされていたのに、これまでほとんどなされてこなかった）。天命反転 reversible destiny を意図した荒川 + ギンズと同様、ジェンドリンもまた「反転 reverse」を目指していた。荒川 + ギンズ遺稿研究の開始宣言として、最後にジェンドリンの言葉を引用して本稿を締め括りたい。

反転された先行性 the reversed priority (ECM) が、わたしの哲学を理解しがたいものと思わせている。しかし、反転 the reversal は突如一気に把握されうる<sup>27)</sup>。

#### 引用および参考文献

荒川修作 / マドリン・ギンズ『意味のメカニズム』第3版、リプロポート、1988年。

Madeline Gins and Arakawa. *Architectural Body*. Tuscaloosa: University of Alabama Press, 2002.

邦訳：『建築する身体 人間を超えていくために』河本英夫訳、春秋社、2007年。

荒川修作 + マドリン・ギンズ『死ぬのは法律違反です — 死に抗する建築 21世紀への源流』河本英夫、稲垣諭訳、春秋社、2008年。

マドリン・ギンズ + 荒川修作『ヘレン・ケラーまたは荒川修作』渡部桃子監訳、新書館、2010年。

Gendlin, E.T. (1962, 1970). *Experiencing and the Creation of Meaning. A philosophical and psychological approach to the subjective*. New York: Free Press of Glencoe. 1962. Reprinted by Macmillan, 1970. 改訂版 Northwestern University Press, Evanston, Illinois, 1997.

Gendlin, E.T. (1981). *Focusing* (second edition. New revised instructions). New York: Bantam Books. 邦訳『フォーカシング』村山訳、福村出版、1982年。

Gendlin, E.T. (1991). *Thinking beyond patterns: Body, language and situations*. In B. den Ouden & M.

27) *ibid.*

- Moeri (Eds.), *The Presence of Feeling in Thought*, pp. 25-151. New York: Peter Lang.
- Gendlin, E.T. (2013, 2017). Arakawa and Gins: the Organism-Person-Environment Process, in Keane, J. and Glazebrook, T (Eds.) *Arakawa and Gins Special Issue of Inflexions Journal*, No. 6: pp. 225-236, *Saying What We Mean: Implicit Precision and the Responsive Order*, Northwestern University Press, Illinois, 2017, pp. 164-172. 岡村心平訳「アラカワ+ギンズ：有機体-人間-環境プロセス」『関西大学東西学術研究所紀要』50巻、関西大学東西学術研究所刊、381-393頁、2017年。
- Gendlin, E.T. (2017). *Saying What We Mean: Implicit Precision and the Responsive Order*, Northwestern University Press, Illinois, pp. 164-172.
- Gendlin, E.T. (2018). *A Process Model*, Northwestern University Press, Illinois.
- 本江邦夫「荒川というブランクについて」『現代思想 総特集 荒川修作+マドリン・ギンズ』1996年8月臨時増刊号、青土社。
- Levin, D.M. (1997). *Language beyond postmodernism: saying and thinking in Gendlin's philosophy*, Evanston: Northwestern University Press.
- 三村尚彦「ジェンドリンとポストモダニズム — プロセスの論理 —」『関西大学文学論集』第59巻第3号、2009年。
- 三村尚彦「コウモリになり、人間になる有機体 — 荒川修作、マドリン・ギンズ「天命反転」について —」『関西大学文学論集』第64巻第3号、2014年。
- 三村尚彦『体験を問いつける哲学第1巻 初期ジェンドリン哲学と体験過程理論』、特定非営利活動法人ratik、2015年。
- 岡田美智男『弱いロボット』医学書院、2012年。
- 塚原史『荒川修作の軌跡と奇跡』NTT出版、2009年。

〔付記〕本研究はJSPS 科研費JP17H02289における成果の一部である。